論　文

居住と生存

ポランニー・イリイチ・玉野井芳郎の思想と「水」のテーマ

中　山　智香子

要　約

本稿は、人間の持続的な営みとしての経済を考える指針として、居住つまり住むことが生存の大切な条件であり、そこに水という要素が深く関わることを、経済思想の観点から考えるものである。このために、カール・ポランニーが著書『大転換』で提示した「居住か進歩か」という二者択一の意味を確認し、これを引き継いだ玉野井芳郎とイヴァン・イリイチが1970年代後半から80年代前半にかけて協働し、エコノミー＝エコロジーという観点から人間と社会にとって重要な「水」の循環と代謝を論じるに至った経緯を考察する。それは、資本主義発展の源泉となったとされる囲い込みのプロセスが「自由な自己決定」による賃金労働を成立させた過程における人間の身体にあらためて着目し、その生存の基礎条件を見つめ直す試みである。こうした原理的考察は、水と深く関わっている人間社会の生存が切迫した課題となりつつある現代世界に重要であると考える。

キーワード：イヴァン・イリイチ、カール・ポランニー、玉野井芳郎、エコノミーとエコロジー、水、内発的発展
経済学文献季報分類番号：01-20、02-10、03-10、05-40

1．序論

本稿の目的は、不透明さを増す現代世界における人間の営み、生業（なりわい）としての経済活動のあり方の指針を探ることである。このために、今からおよそ半世紀ほど前に提示された内発的発展という考え方について、思想史を踏まえたアップデートを試みる。内発的発展という考え方は、端的に言えば、昨今国内外で喧伝されるSDGs（持続可能な開発・発展目標）や、サステイナビリティ（持続可能性）概念の歴史的源泉の一つである。実際、「持続可能な発展」という概念はすでに1987年に、環境と発展（開発）の関係を考える国際組織によって、「次世代のニーズを損なわないように現在のニーズを満たすような発展（開

発)」と定義されていた[1)]。この点において、内発的発展という考え方は現代においても、振り返って確認し、検討する意義をもつといえるだろう。もちろん、この半世紀あまり国際社会には、さまざまな状況変化や学問・思想の潮流の変化、展開があり、単なる復古や懐古に意味はない。本稿では特に、この間次第に重要性を増す水というテーマについて、これが内発的発展論と関わる状況から次第に浮上してきた局面を整理し、その意味を考察する。

さて、水という素材がサステイナビリティにとって重要であることは、論を俟たないだろう。人間を含むすべての生物の生存を維持するために水は不可欠であり、農業や工業、産業など人間社会のさまざまな営みにも、水の果たす役割はかなり大きい。だから歴史的にみれば人間社会はしばしば、水へのアクセスのよい場所、海や湖水、河川などの流域を中心に発展してきたのである。そしてこのことはたとえば、19世紀ドイツで発達した近代地理学によって明らかにされてきた。一方、同じ頃の市場分析中心の経済学では、稀少性から価値を考えるために、いわゆる水とダイヤモンドの逆説などにみられるとおり、原則として豊富に手に入る水は価値のない、あるいは価値の低いものとされていた。また水の特質や人間社会との関係から生じるのはおもに技術的な問題であり、これに関する問題を扱うのは自然科学であって社会科学ではないと考えられてきた。ところが内発的発展論があらわれてきた局面で、人間の生存や人間社会の存続が問い直されるようになり、これと並行して社会科学における水というテーマの重要性が、次第に明らかになったのである。

本稿では、1980年前後に出会ってから数年間、深く共感し合ったイヴァン・イリイチと玉野井芳郎の協働を軸として考察を行う。玉野井の思想は当時の内発的発展論の論者たち、たとえば鶴見和子のそれと呼応しており[2)]、鶴見による内発的発展の定義は「(地球上すべての人びとおよび集団が、衣食住の基本的要求を充足し人間としての可能性を十全に発揮できる条件を作り出すことという）目標において人類共通であり、目標達成への経路と創出すべき社会のモデルについては、多様性に富む社会変化の過程である」(鶴見1980/1997, 522ページ）とするものであった。1981年に行われた玉野井と鶴見の対談は、水と社会科学に関する重要な論点を含んでいる。ちなみに玉野井は、1977年に行われた対談で物理学者の槌田敦から、エネルギーやエントロピーの問題を考える際には水サイクルという開放定常系を考慮する必要があるという指摘を受け、水と土を中心とする生物サイクルを理解できたと述べているので（玉野井＆槌田1977/2002, 191-192ページ)、おそらくこの頃から問題意識を持ち続けたのであろう。最晩年には、水と土から成るサイクルを等身大の生活者の「地域における…日常性の生態的生活環境」(玉野井監修1986, 6ページ）と位置づけ、遺稿は「コモンズとしての海」[3)] であった。イリイチはまさにこうした玉野井の視点に共鳴したのであった[4)]。

ところで玉野井とイリイチとが共感した思想的基盤はカール・ポランニーの思想であり、

両者の協働から現代世界へと繋ぐことは、ポランニーの思想の現代的意義を考察することでもある[5)]。実際ポランニー自身､稀少性とは異なる経済のあり方の核心に生存（subsistence）の概念があると1950年代に論じて（Polanyi 1957）、広義の経済への道を拓き[6)]、経済人類学という研究領域を打ち立てた一人となった。そもそも内発的発展論は、アメリカ、イギリスなど西欧先進諸国で作られた近代化、発展の理論を後発国、新興国にあてはめず、ラテン・アメリカや中東、アジアなどそれぞれの地域の「内発性」に即して考えるよう主張し[7)]、同時代に展開された従属理論や世界システム分析と呼応した。そしてこの従属理論や世界システム分析の源泉の一つにポランニーの思想がある[8)]。21世紀初頭には、ポランニーの『大転換』における19世紀イギリス分析が、グローバル世界の発展途上国の問題を考察する手がかりになると評され、同書は現代的意義をもつ古典として再読されるようになった[9)]。本稿はここに、水という切り口から新たな視点を多少、付加することを試みるものである。

2．生存（サブシステンス）経済の系譜

本稿が着目するのは、ポランニーが『大転換』（1944）で提示した「居住か進歩か」[10)]という、やや奇妙な二者択一である。いうまでもなく、近代のヨーロッパ中心の世界史、資本主義発展の歴史を語る際に「進歩」の概念に対置されてきたのは「停滞」であり、圧倒的に前者に肯定的、優先的な価値がおかれた[11)]。これに対してポランニーは「居住」という概念を置くことで、それが単に進むか滞るかという同じ軸で測れないことを示したのであった。玉野井とイリイチはいずれもこの「居住か進歩か」という問いに示唆を受けて思索し、それぞれの仕方で人間の生存をめぐる論点を抽出したのである。

結論を先取りして述べるなら、玉野井はポランニーの論理のなかから生存権という概念を抽出する一方で、ドイツの近代地理学やこれと近接したドイツ歴史学派経済学の知見を活かし[12)]、生存権を保障する広義の経済の基盤を、空間や「場」の地域性（ローカルであること）に求めた。他方、イリイチは文字通り居住、住むことが生存の基盤である、すなわち人間の生存（サブシステンス）を支える衣食住の「住」が「食」や「衣」をも支えるという側面を凝視し、ここから「家」や居住そのもの、そしてそこでの生業のあり方を考察した。このような両者が邂逅し協働した成果として、生物としての人間の居住を支える体系としての生命系のエコノミー、そのシステムの中を循環する水への視点が、1980年代なかばに提起されたのであった。

玉野井は1970年代からポランニーの著作の翻訳を手がけるなど、日本のポランニー研究の先駆けの一人であったが、1980年12月、初来日したイリイチに出会っている[13)]。ここから両

者はたがいの関心の近さを認識し、イリイチが来日直前に完成させた『シャドウ・ワーク』を玉野井が翻訳するなど、玉野井が亡くなる1985年までの4年間あまり、ゆたかな研究交流がおこなわれたのであった[14)]。

なお、この『シャドウ・ワーク』の邦訳が広く読まれたことを通じて、ポランニーからイリイチへの影響がよく知られてきた日本の状況は、実は例外的である。イリイチ自身のもともとの専門領域は神学や歴史学であって経済学ではなく、民衆の生活を歴史的に解明するという視点から、同時代の文明や産業、経済の問題を考察するうちに、ポランニーの思想、特に『大転換』へとたどり着いた[15)]。こうした経緯もあって、イリイチの思想を経済的な側面から分析したものは多くはなく、ましてポランニーからの影響もあまり論じられてこなかった。そもそもイリイチ自身が専門知識の制度化に疑義を呈し、あえて「素人」と公言したエッセイとして議論を展開したため、研究という領域自体に馴染みにくかったという事情もある[16)]。しかしかれの開発批判の視点が「脱開発」の方向を探る学際的なコラボレーションを生み[17)]、また1956年からメキシコで20年にわたって行った共同研究が、セルジュ・ラトゥーシュ[18)]、やジャン＝ピエール・デュピュイ[19)] など、経済に関してユニークな考察を行う論者を輩出したという事実に照らせば、イリイチの経済的分析は注目に値するといえる。一方、経済学者の玉野井が到達した地点は、たとえば民衆史や社会史の研究領域からすれば、特に新しいものではないかもしれない。それでも、統治の学から市場分析へと主軸を移した経済学の歴史的経緯そのものが、民衆や生命への問題意識を不可視とし、捨象したかの立場をとったことに照らせば、玉野井の晩年の仕事もやはり注目に値すると思われる。

また玉野井とイリイチの両者が協働の時期にジェンダーの重要性に着目したことも見逃せない[20)]。『シャドウ・ワーク』は、刊行時から幅広い読者層を獲得したものの、もっぱら女性のシャドウ・ワークつまり家事労働を分析したものと、限定的にとらえられることが多かった[21)]。そして玉野井とイリイチのこの関心は、先行研究でおよそ置き去りにされてきた。それはフェミニズムという学問領域が十分に社会科学の諸分野と融合されてこなかった歴史を示すが、他方でまた、経済学の理論的研究が家計（household）概念を十分に考察してこなかったことにも関わっている。

1990年代にはフェミニズムのみならず、人類学の領域で示されたさまざまなフィールドワークの成果が、経済理論における家計概念の再考を促したが、市場分析の通説的な家計概念のモデルは、こうした成果を包摂することをむしろ拒絶する傾向にあった[22)]。人類学の成果は、しばしば途上国、新興国をフィールドワークの対象としたものであり、そこでは女性を中心した労働と同時に、社会における稀少な水や灌漑の役割も論じられていたが、これらはたとえばエコフェミニズムなど、特定のサブカテゴリーの学問領域に位置づけられ、経済

理論の中心部で論じられることはほとんどなかったといってよい。

しかし21世紀にはいると、たとえばウォーラーステインが、世界システム分析を新たな世界的、思想的状況のもとに置き直し、生産過程や労働の問題をより精緻にモデル化しようとする試みのなかで、家計という概念に着目した。「労働者を孤立した個人と考えるのは現実的ではない。ほとんどすべての労働者が、通常は性や年代の異なる成員とともに成す家計の構造を通じて、他者と結びついている。多くの、おそらくほとんどの家計の構造は家族と呼ばれるが、家族の関わりが家計の唯一のあり方というわけではない。家計はしばしば共通の居住者をもつが、そうでないこともよくある。」（Wallerstein 2004, p.32）

そもそもウォーラーステインは1980年代以降[23]、人種や国籍などの労働力の異質性を問う中で、性差にも目を向けるようになり、この関心の延長上で家計概念の再考の必要性を論じるに至ったのである。ただしこの点もまた、インターセクショナリティの議論の中で昨今、ようやく注目され始めたに過ぎない[24]。

3．居住か進歩かという二者択一

3.1. 生存権の空間的基盤

ではここで、居住か進歩かという二者択一に込められた意味を検討しよう。ポランニーは『大転換』において、イギリスで貧困者を救うために制定されたスピーナムランド法（1795年）の分析にかなりの紙面を割いている。イギリスが産業革命の途上で、さらにその百数十年前に制定された「定住法」の一部や教区農奴制を撤廃した際の措置がこの法律であった。定住法や教区農奴制は、人びとの生まれ育った場所で適宜仕事を与え、年を重ねたり病を得たりしても生活できるよう責任をもち、また貧民の埋葬の世話もするよう定めた制度であったが、撤廃によって「労働者の物理的移動の自由が復活し…労働市場を全国的規模で確立できる」（ポランニー1944/1957/2001、邦訳156ページ）前提が整えられた。それはマルクスが本源（原始）的蓄積の過程として叙述した囲い込み・封建社会の解体の過程と連動していた。まさにそのタイミングで、スピーナムランド法はいわば逆に、働かなくてもパンの価格を尺度とした一定額が手に入るよう、全国一律で個人（成人男性）とその家族の単位に保障することを定めたのであった。

玉野井は、マルクスとポランニーの商品概念についての論考で、ポランニーのこのスピーナムランド法の分析が重要であるとした[25]。ポランニーがこれを「生存権」の保障、導入であると指摘したことを紹介し、「「貧民」に一種の最低所得を保障するスライディング・スケールの決定である」（玉野井1977/1982/2002, 54ページ）としたのである[26]。ちなみにイリ

イチは玉野井に会う以前に、この玉野井の論考の初版を読んでいたそうだ。ただし、一見すると人道的かつ適切な措置であるかに見えるスピーナムランド法は、実際には給付額の急増で政府を次第に強く圧迫しただけでなく、当時のイギリス社会をひどく荒廃させ、結局、数十年後に撤廃された。玉野井は、それでもポランニーがスピーナムランド法にひとつの夢、つまり生存権をめぐる労働者たちの要求を法制化する状況に恵まれていれば労働市場の形成を阻んだかもしれないという夢を託したのではとして、余地を残した。そしてここに、イリイチのシャドウ・ワーク概念との関連を示唆したのであった。

一方、イリイチが『大転換』に着目したのは、生存権という権利の側面ではなく、むしろ生存そのものについてであった。そもそもポランニー自身が、このスピーナムランド法の分析に先立つ第三章「居住か進歩か」、すなわち件の特異な二者択一を主題とする章において、人は生存のために何らかの場所に「居る」必要があるという論点を明示していたのである。ここには市場経済や資本主義の発展という「進歩」によって蔑ろにされ、否定されたものが、「居住」という概念に集約されていた。ポランニーは、進歩や改善を求める動機が社会的な「ディスロケーション」という犠牲のもとで、賃金労働市場の形成を進めるとした。ディスロケーションは転置、配置換えであり、囲い込みによってもともとそこに居住していた者たちを立ち退かせたこと、それによる混乱を意味しているが、これを人びとが享受していた社会的なロケーション（場所性）の否定という意味に理解することができる。

ポランニーが続けて論じるとおり、「囲い込みは適切にも、貧者に対する富者の革命と呼ばれてきた。…彼らは、貧者から共有地におけるその共同用益権を文字どおり強奪し、それまで侵すことのできなかった習慣の力によって貧者が長いこと自分とその子孫のものであるとみなしてきた住居を破壊した。網の目のような社会的関係は、引き裂かれつつあった。荒れ果てた村と、以前には人間の住居であった廃墟が、荒れ狂った革命の激しさを物語っていた。この革命は、国の防衛を窮地に陥れ、都市を荒廃させ、…人びとを苦しめ、礼儀正しい農夫を乞食と盗賊の群れへと変えたのである」（Polanyi 1944/2001, 邦訳61-62ページ）。「網の目のような社会的関係」は、文字通りセーフティネットだろう。居住は住居のみならず、その建物の外側にある共同体や都市とともに存在するものであった。ここに共同用益権、つまりコモンズをめぐる使用権の問題が言及されていることも注目される[27)]。

もちろんポランニーは生存権に言及したし、イリイチは『シャドウ・ワーク』において、ポランニーのスピーナムランド法の分析に言及しながら、賃金労働の意味の変容を論じた。すなわち救貧院が当初の救済という意味から、怠惰な者の収監や意図的な悪条件のもとでの強制労働によって性格を矯正するという、懲罰的意味を持つ監獄へと変容した経緯は、まさに自由な労働市場と賃金のシステムの形成と軌を一にしていた[28)]。しかしこれは比喩でも偶

然でもなく、身体の拘束と身体に及ぼされる権力に関する重要な論点なのである。一見すると自由な自己決定に基づく賃金労働は実質的には、マルクスが見抜いたとおり、本人に意識されないが他に選択肢のない強制労働であり、間接的な奴隷制とすら呼ばれうるものであった[29)]。そしてイリイチが深く受け止めたのは、この賃金労働が同時にシャドウ・ワーク、つまり支払われず陰で賃金労働を支えるさまざまな労働を生み、その双方の労働が「人間生活の自立と自存の基盤（サブシステンス）を破壊する」（Illich 1981/2009, 邦訳二頁）という点であった。『シャドウ・ワーク』の分析の中心には、このサブシステンス概念があり、労働や人間の活動一般を支える「場所」への視点が開かれている[30)]。

端的にいえば、監獄に身体を拘束され、強制的に労働させられるという制度が次第に整備されたことで、人間が生きる場所に根づいて働くというあり方が徐々に、しかし決定的に変質したということだ。賃金労働とシャドウ・ワークは、このような変質の原因となった、いわば双生児的な制度であった。しかしそれでも、ひとは誰しも生存する限り、どんなに僅かな空間であっても、あるいは移動しながらであっても、どこかに居なければ生きられない。生存権という抽象的な、つまり非空間的な権利として拾い上げることも大切ではあるが、その権利に見合う一定の貨幣額で保障するだけでは、いわば生存の肝心の部分を欠落させたままだと、イリイチは考えたのである。

3.2. 生存（サブシステンス）に仕掛けられた戦争　－「居住」と「家」というテーマ

こうして居住 habitation、住まうこと living, dwelling の意味をポランニーから継承しつつ、さらに踏み込んで考察することが、イリイチにとっての課題となった。イリイチは、ホウム（うち）とハウス（邦訳では家）を区別し[31)]、また人間のそれぞれの文化に根ざした住まいを、車を休ませるだけのガレージから区別した[32)]。強制労働のために収容されるという監獄の制度は、ここではより一般的にガレージの比喩で説明されている。

『シャドウ・ワーク』における居住の概念との関わりでは、ヴァナキュラーという言葉が注目される。それは根づいていること、居住の、という形容詞であり、語源になったラテン語は、家で育て、家で紡いだ、自家産、自家製のもののすべてを示す用語である[33)]。とはいえイリイチの力点は前資本主義的な「家」の暮らしに戻ることではなく、むしろ「未来社会の生活のあらゆる場でもう一度ひろがるかもしれない存在（あること）、行動（すること）、制作（つくること）のヴァナキュラーな様式がありうることに気づかせ、その議論をひきおこそうとつとめる」（Illich 1981/2009, 邦訳130ページ）ことであった。すでに述べたとおり、その際に障害となるのが、賃金労働の出現、増大とともに増大したシャドウ・ワークの存在であり、それがヴァナキュラーな暮らしに取って代わって、見分けがつかないようにしてし

まったことであった[34)]。

ちなみに玉野井はこのヴァナキュラーという言葉について、文化的な側面から取り上げ、「イリイチの言う『ヴァナキュラーな価値』とは、ローカル・ピープル（地域の民衆）が生活を通してつくり上げる固有文化の評価を指している。これにたいし、異なった人間生活の間に設けられる共通の便宜尺度をかりに『文明』と呼ぶなら、文明と文化はひとまず区別されねばならない二つの概念となる。実は前者を後者から分離・離床させたところに近代社会が成り立ったといえる。」（玉野井1982/2002、151ページ）と述べている。続いて玉野井は西洋文明の暴走を語り、ヴァナキュラーな価値にこれを抑制し制御しうる人間の生の営みとしての役割をみている。従来、西洋中心の世界史において文明に対置されてきたのは「未開」や「野生」、「野蛮」であり[35)]、ここに玉野井があえて文化という概念を対置していることが興味深い。玉野井はヴァナキュラーという概念を介して、いわば内発的発展論の核心に到達したともいえる。

さて、イリイチはサブシステンスを居住にふたたび埋め戻す手がかりとして、「人間の満足すなわち欲求充足の性質それ自体を問題とする」（(Illich 1981/2009, 邦訳45ページ）対立軸を示した。エーリヒ・フロムの定義にしたがうというそれは、一方の極に「持つこと」、他方の極に「在ること」や「行為すること」[36)] を置く対立軸で、前者に商品集中社会が対応し、後者には「実にさまざまな社会が、扇型に並ぶ。そこでは生活は、自立と自存を志向する活動のまわりに組織され、それぞれのコミュニティは、成長の要求に懐疑的となることで、コミュニティ独自のライフスタイルをいっそう強化する」（Illich 1981/2009, 邦訳45-46ページ）ような社会が対応するという。イリイチは後者が昔からの伝統文化を引き継ぐだけの社会ではないこと、むしろ技術上の進歩や現代の道具がさまざまなライフスタイルを支える可能性も指摘して（Illich 1981/2009, 邦訳76ページ）、前者をホモ・エコノミクスやホモ・インダストゥリアリスつまり経済人や産業人、後者をホモ・アーティフィクスに対応させた。ホモ・アーティフィクスは住む技術、生活する（生きる）技術という意味でのアートを携えた人間であり、そこには美的なもの（芸術）の重視というニュアンスも含ませた。

この論点が居住に関する論考にも引き継がれている。住むことはそれぞれの土地、それぞれの共同体に固有であり、「愛する技術、夢見る技術、苦しむ技術、そして死にゆく技術といった、生活する技術の全体が、それぞれの生活様式をユニークなものにしている」（Illich 1984/1992, 邦訳20ページ）という。イリイチによれば、家やそれが建てられる空間はヴァナキュラーなものであり、また人びとが継続的に住まうことによって、ヴァナキュラーなものになっていく。人びとが家を単に眠るための場所としてではなく、また外部や権力から割り振られて収監される場所としてでもなく、そこに居て賃金労働ともシャドウ・ワークとも別

の「自分に固有の仕事」[37]（Illich 1981/2009, 邦訳50ページ）をできる場所とすることができれば、経済や産業に追い立てられる社会を変えていく端緒となるとして、イリイチは住まうことそのものや家のあり方に、わずかな希望を見出したのであった。

以上の論点は、それだけみれば特に新奇なものではなく、たとえば19世紀後半のジョン・ラスキンやウィリアム・モリスの（初期社会主義と呼ばれた）思想の域を超えないと思われるかもしれない。しかしこうした居住の分析からイリイチはさらに、水の問題に切り込んだのであった。あらためて玉野井の水への視点と重ねながら確認しよう。

4．社会科学における「水」という要素

4.1. 循環する水の原理論：エコロジーとエコノミー

冒頭で触れたとおり、玉野井は経済理論や経済思想史、経済体制の比較研究などから、ポランニー研究を通じて次第に広義の経済、生態学（エコロジー）、生態系（エコシステム）の問題へと視野を広げ、1970年代の後半には自らの研究を「エコノミーとエコロジー」という主題のもとに整理するに至っていた[38]。エコロジーという言葉の語源がギリシャ語のオイコス、すなわち「家」が語源であって、1886年にヘッケルが用いたとする指摘は[39]、生態系たるエコシステムが生物にとって単なる環境ではなく、エコノミーつまり経済と一体となった循環システムをなすことを示唆するものである。

「エコノミーとエコロジー」は、鶴見が内発的発展論のために繰り返し言及した玉野井の地域主義にとって、不可欠の要素であった。玉野井の地域主義は、地方を「地方（じかた）」つまり土地の形と、それに結びついた人びとの暮らしのあり方ととらえることに意識的であった[40]。玉野井は地方の朝市など小規模な市に並々ならぬ関心を寄せ[41]、野菜、鮮魚、食肉という生鮮三品のうち、特に野菜は「いのちの水をふんだんに含む」（玉野井1977、128ページ）として重要性を強調した。緑色植物が、太陽エネルギーを受けた生物界の活動を物質界との関わりからとらえるエコロジーのサイクルにおける「生産者」であり、サイクルの起点となるからである[42]。「生産者」たる植物は土壌の微生物や物質との代謝経済によって、このサイクルを下支えする。

とはいえ、このエコサイクルが人間の生業に関わるのは、農業においてだけではなく、工業を含めた産業全般に関しても同様である。玉野井はまずエネルギー循環やエントロピーの問題に着目したが、1980年代初めごろには「経済学が理論的に処理しかねているひとつの問題」（玉野井1981/2002、86ページ）として水を明示的にとりあげ、水は生産要素かと自問して、投入要素（インプット）よりも通過要素（スループット）であると自答した。そして

「水は生産行程の内部をつねに流れており、用水と排水は表裏の関係にあることがつきとめられなければならない」（玉野井1981/2002、87ページ）と論じるのである。つまりエコサイクルを考える際には、農業用水や工業用水を用いて行われる生産の結果としての生産物、商品だけでなく、同時に出る汚染物や排出物、廃熱、廃棄物、これらを含んだ排水にも着目する必要があるということである。またこれを人間の身体で考えれば、栄養を摂取する局面だけでなく排せつも含めて考える必要がある、ということになる（玉野井1981/2002、92ページ）。個体としての人間の生命と農業や工業という生産の営みは、水を介して同じ「代謝」のプロセスとして把握されることになった。

イリイチはこのような視点を玉野井から継承しつつ、さらに考察を深めた。1986年の水に関する著書では[43]、水が一般的に洗い清め浄化するというはたらきをもつことが述べられ、古代都市ローマにおける水道の叙述を経て、「循環」が考察された17世紀後半へとテーマが推移する。しかしそれは、水を介した「マクロコスモスとミクロコスモスの関係」[44]について、文化が媒介して両者を相互に補完させる状態を原理とみつつ、その均衡が失われた1660年頃以降、現代に至るまでのあり方を、より長期の文脈の中に置いて相対化しつつ考えるものであった。玉野井による身体とエコシステムにおける水の代謝の相同性という理解の仕方は、イリイチによればまさに近代の産物ということになる。イリイチの説明にはややわかりにくいところがあるが[45]、「水」をより広い意味でとらえ、それがかつては文化に応じて雨や海水、血、尿や乳、精液なども含んでいたとする（イリイチ1985/1986、264-266ページ）。そして水が純粋で混合物のない H_2O だけに還元されることになった「近代」以降、逆にさまざまなものの循環がテーマとして浮上したと論じたのである[46]。

こうして19世紀中頃から現代に至るまで、「水は都市の中を休むことなく『循環』し、そこから汗と排泄物とゴミとを洗い流さなければならない」（イリイチ1986、102ページ）ものとなった。そこで都市の汚れ、つまり排泄物、廃物、下水などの処理が都市の重要課題となったのである[47]。ちなみにイリイチは、このことを論じたエドウィン・チャドウィックの論文が、アダム・スミスの百周年記念に『諸国民の健康』というタイトルで出版されたこと、チャドウィックがやがて貧困法に関する委員会メンバーとして労働者の衛生状況を報告したことを、わざわざ明記している（イリイチ1986、102-104ページ）。それは玉野井にオマージュを捧げ、広義の水の問題がエコノミー（経済）の課題であることに、あらためて注意を喚起するためだったのではないか。とはいえ、その後この指摘や水の原理論が経済学や経済思想において論じられることは、ほとんどなかった。

4.2. 水利と治水：置き去りになった水の原理論

玉野井の水に対する関心はまた、前節で考察したようなエコノミーとエコロジーに関わる原理的な関心にとどまらなかった。遺稿「コモンズとしての水」が示すとおり、海や河川、またその流域の利用、つまり「水利」は地域単位で、近隣のコミュニティや社会によって共同でなされてきたが、他方で昔から世界の各地で「治水」として、統治権力のおもな関心事となってきた。人間や社会にとって不可欠な水へのアクセス、水の供給の源泉を、誰が所有し誰が利用に供するかは、権力の配分に大きな影響を与えてきたのである。玉野井は、従来の経済学が所有の問題をもっぱら生産要素に限って論じてきたのに対し、いやそれだからこそ、水は生産要素かと問いかけ、なかば否定的な答えを出したのであった。

水や流域は世界の各地でそもそもはコモンズ、つまり共有物、共有地であり、やがてしばしば囲い込まれて、広義の何かの「浄化」に寄与し、その結果、汚れた水となって流れたり滞ったりして、負の公共財となってきた[48)]。汚れた水が人間の身体に直接・間接的に入り込んで有害物質を身体に残存させ、次世代にまで影響を持続させることは、たとえば水俣病の例が典型的に示してきた通りである。水俣病の事例や水俣闘争は、鶴見を含む内発的発展論の担い手たちにとって、社会連帯のきわめて重要な基盤であった。

玉野井は1981年の鶴見との対談において、水への関心と内発的発展論に沿った形で、その年に調査してきた台湾の水利システムについて報告した。すなわち、多数の溜池を連結させてネットワークをつくるアジア的な灌漑の方式、「末端がメインになるような水利システム」（玉野井＆鶴見1981/2002、204ページ）が、カール・ウィットフォーゲルらのマクロの中央システム的、大規模ダム的な治水と異なって地域に即しており、内発的発展に見合うと論じた。ちなみに、この水利灌漑システムを作ったのは、当時の台湾総督府の土木技師、八田与一であった[49)]。

この溜池は「掘るものではなく囲むという作り方で…土地の傾斜に堰堤をもってきて、それで囲む」（玉野井＆鶴見1981/2002、206ページ）ことで、セメントやコンクリートをほとんど使わず、玉石や砂利、小さい砂や粘土などで水が浄化される仕組みの湿式土堰堤であり、当時の日本や台湾でおよそ唯一であったという。ここには水をめぐる社会的インフラ、灌漑や土木技術の問題と同時に、日本統治の植民地時代という問題が絡んでいる[50)]。戦間期の日本は自国の治水の土木技術を活かして満州等植民地でのインフラ整備に取り組んだが、ダム建設、発電、コンビナート建設という複合的な事業の担い手は、たとえば当時の日本窒素肥料株式会社であった[51)]。ウィットフォーゲルが指摘した通り、大規模な技術を駆使した大規模な水利開発とそのインフラを維持する治水は、その規模に見合った労働力の動員を必要とすることで、専制主義など自由度の低い政治体制を原理的に要請する。玉野井はこの点

も踏まえ、「国家に対する批判的原理となるのは、土と水をマトリックスとする地域主義よりほかにない」（玉野井＆鶴見1981/2002、219-220ページ）と述べて、水系、水域で区切る地域主義の自立的あり方を論じたのであった。ここに、文字通り生存を賭した闘いの位相があらわである。

一方、地域の自立性という観点からイリイチの水論を振り返ると、実はこちらももとは、アメリカのダラス市に人工湖をつくるという過去70年来の計画[52]が市民を分断するという状況で依頼された講演の記録であったことがわかる（イリイチ1986、9－10ページ）。この事例でも焦点となっていたのは、住民たちによる共同用益的な水利用と、政治単位の統治側による外発的大規模開発、大型ダム技術の治水との対立であった。水やこれを取り囲む居住の場所は、無価値どころではなく生存に関わる最重要の要素として、異なる利害関係者の争奪の対象となる。しかしイリイチは人工湖の計画そのものへの賛否を論じるのではなく、ダラスという都市の居住空間がもはや、市民の「生きざまを都市空間に刻み込む術」（イリイチ1986、30-32ページ）、つまり能動的な居住を許容できないものとなっており、人びとの住まいがかれのいうガレージになってしまっていることを指摘し、あえて都市と水との関わりの原理だけを講演したのであった。

玉野井とイリイチのこれらの仕事を同時代の文脈に置き直すなら、1930年代のいわゆるニューディール政策の時期にアメリカのフーヴァーダムが先駆となった大規模ダム時代が[53]、1970年代にはすでに先進諸国で限界を露呈し、そのままのやり方を発展途上国、新興国に輸出しようとして問題が浮上しつつあったのが1980年代であった[54]。特にインドのナルマダー川流域のサルダル・サロバルダムの建設計画は、1980年代の市民からの反対の声やアドボカシーNGOの批判により、世界銀行の構造レジームを変えるに至ったほどである[55]。しかし玉野井やイリイチの議論がそうしたグローバル世界の動向と連結されることはなく、また21世紀の初頭頃を境に、治水や水利の問題が原理的に論じられる機会は次第に減少した。おそらくこれらの問題に含まれる激しい政治的対立やこれに伴う社会的分断が、研究の進展を阻み続けてきたのだろう。今後の研究の展開は喫緊の課題である。

5．結論

以上、本稿ではカール・ポランニーの居住、生存に関する考え方を継承した玉野井とイリイチの1980年代前半の協働によって、内発的発展論と関わりながら「水」が社会科学のテーマとして抽出された思想史的経緯を考察した。「水」というテーマは今日では、サステイナビリティ研究として注目を集めつつあるが、数々の社会的分断を生んできた事例の具体的検

討と照らし合わせるべき、水の原理論、水という要素の社会科学における意味の考察は、およそ不十分である。これを見直し、現代の生態的状況も視野に入れながら考察を進めていくことは、きわめて重要な課題である。

【註】

1）Brundtland Report of the World Commission on Environment and Development による定義。原文は Sustainable development is development that meets the needs of the present without compromising the ability of future generations to meet their own needs,

2）鶴見1989/1997, 539-540ページ。鶴見は内発的発展論に関して、玉野井の地域主義に繰り返し言及している。

3）玉野井1985/1990. ただしこの論考は玉野井の死後に刊行された。（生前の）遺稿は「人間におけるジェンダーの発見」（玉野井監修1985/1986）であるとも言われている。

4）イリイチの「水」論（イリイチ1986）は1984年に行った講演（Illich1984/1992b）を基にしているが、日本語版だけのオリジナルな論考である。また玉野井監修・新評論編集部編1986は玉野井の最晩年にイリイチが来日した際の記録であり、上記の「水」論に関するインタヴューが収録されている。

5）本稿の元になったのは、2017年10月にソウル（韓国）で行われた第14回国際ポランニー会議での報告 'An Investigation of ecological potentiality of Polanyi's thought: Tamanoi and Illich as Polanyian successors' である。なお姓の Polanyi はさまざまな邦訳において、「ポランニー」、「ポラニー」の二通りで記載されているが、本稿では「ポランニー」の記載にしたがった。

6）近年ではポランニーと環境問題、人新世との関わりも論じられている（Steinberg 2019、中野2019など）。

7）鶴見（1980/1997, 517-522ページ）は、発展の内発と外発を最初に明確に区別した社会学者としてタルコット・パーソンズを挙げ、ダドレイ・シアズ、フェルナンド・カルドーゾ、ダグ・ハマーショルド財団らの問題提起や定義の検討を行っている。

8）筆者は世界システム分析のおもな論者、とりわけイマニュエル・ウォーラーステイン、ジョヴァンニ・アリギとポランニーの関係を論じたことがある（Nakayama 2020）。

9）ジョセフ・スティグリッツは『大転換』第二版（2001年）に長く肯定的な序文を寄せ、「ヨーロッパ文明が果たした転換は、今日、世界の発展途上諸国が直面している転換に類似しているので、あたかもポラニーが現代の諸問題を論じているかのように感じられる」（邦訳 vii ページ）と評した。この序文は広い読者層を獲得するきっかけになったようだ。

10）この対立項は、1603年に公布されたというイギリスの公文書に示されたもので、「貧しい者はその目的つまり居住に満足し、ジェントルマンはかれの望みである進歩を妨げられてはならない」'The poor man shall be satisfied in his end: Habitation; and the gentleman not hindered in his desire: Improvement'（Polanyi 1944/1957/2001, p. 36）とある。

11）そしてこのことに19世紀の段階で明確に異を唱えた一人がマルクスであった（植村2001、第二章「世界史」）。また植村2016は、このようなマルクス的世界史観を展開した論者たちの起点にローザ・ルクセンブルグを置く。

12）玉野井1974/2002b は、市場経済や都市の発達が海や河に沿って、つまり「水のチャネルをとおして」（144ページ）なされてきたことを、アダム・スミスの指摘もはさみつつ、ドイツ歴史学派のフリードリヒ・リストやマックス・ウェーバーに関連させて論じている。

13)「彼（イリイチ）の来日目的は、二つの国際会議に出席することだった。一つは国際平和研究学会の主催で開かれた横浜での「アジア平和研究国際会議」（12月１～５日）。もう一つは、国連大学と広島大学平和科学研究センターとの共催で開かれた広島での平和研究会議（同８、９日）である。私がイリイチに初めて会ったのは、この第二の会議の席上だった。」（玉野井1981、177ページ）なおイリイチはこの二年ほど前に、玉野井の英語論考（Tamanoi 1977/1983）を読んでいたそうである。初来日の機会にイリイチは一ヵ月ほど滞在し、東京、広島、京都、沖縄、水俣を訪れたが、沖縄は玉野井の招きによるものだった（イリイチ＆玉野井1982、228ページ）。初対面の際には、交流は始まったものの十分に議論を深めることはできなかったようだ。とはいえ玉野井は、イリイチの講演から「かれの歴史の視座は、私の見るかぎり、カール・ポランニーの唱道する＜普遍的歴史＞に近いようである」（玉野井1981、180ページ）と推測していた。

14）イリイチは1982年の再来日時にあらためて玉野井と対談し、「玉野井さんとお話しすることによって、私がいま進めております研究が深まってゆくと考えられます。というのは、私たち二人がカール・ポランニーという共通の先生に師事していることが一つの理由です」（イリイチ＆玉野井、1982, 228ページ）と述べている。

15)「私（イリイチ）はカール・ポランニーから、近代史は市場経済の『埋め込まれた状態』からの離床」（disembedding）として理解できるという考え方を学びとった」（Illich 1981/2009, 邦訳２ページ）。

16）1970年代の著作『脱学校の社会』、『脱病院化社会』などは、鋭い文明批評の視点が早くから評価されたが、その学際性やテーマの多様性が、細分化された学問領域で取り上げられにくかった。ただし2009年にはイリイチ研究のオンライン雑誌 The International Journal of Illich Studies も刊行され、再評価が進んできた。

17）Sachs, W.（ed.）1992, *The Development Dictionary: A Guide to Knowledge as Power*, Zed books（『脱「開発」の時代：現代社会を解読するキーワード辞典』晶文社、1996年）邦訳書には編著者としてイリイチの名が併記されており、実際内容や構成にイリイチの果たした役割が大きいことがわかる。

18）日本語で読むことのできる著作は、『経済成長なき社会発展は可能か：＜脱成長＞と＜ポスト開発＞の経済学』（作品社、2010年）、『＜脱成長＞は世界を変えられるか：贈与・幸福・自律の新しい社会へ』（作品社、2013年）、『脱成長（ダウンシフト）のとき：人間らしい時間を取り戻すために』（アルパジェス , D. との共著、未来社、2014年）である。

19）日本語で読むことのできる著作には、『物の地獄：ルネ・ジラールと経済の論理』（デュムシェル ,P. が第一著者、法政大学出版会、1990年）、『ありえないことが現実になるとき：賢明な破局論に向けて』（ちくま書房、2012年）、『経済の未来：世界をその幻惑から解くために』（以文社、2013年）、『聖なるものの刻印：科学的合理性はなぜ盲目か』（以文社、2014年）などがある。イリイチの『シャドウ・ワーク』には、稀少性とねたみに関する研究に関して、デュピュイに多くを負うと、注に示されている（Illich 1981/2019, 邦訳254-255ページ）。

20）玉野井は最晩年にしばしばジェンダー研究の重要性を強調した（玉野井監修・新評論編集部編1986等）。

21）イリイチのジェンダー的視点は、フェミニズム研究の中では、かれとともに研究を進めたクラウディア・ヴェールホフやバーバラ・ドゥーデンらの仕事とともに、女性性を母性などにひきつけて実体化し、結果的に女性の位置づけを限定してしまうという批判の対象となった。たしかに『シャドウ・ワーク』の記述には、そうした偏りが認められる。とはいえそれが、同書の価値をまったく無にするわけではない。

22）たとえば Kabeer 1998/2000, pp. 96-98は、特に南アジアのフィールドの成果が、新古典派的家計経済理論への包摂を拒絶された経緯を明らかにしている。その家計経済理論はゲイリー・ベッカーによる家計の合理的意思決定論（1965）に基づく。しかし家計を一にする人びとの意思決定に「家」の意味

を限定するのは、考察として不十分である。

23）ウォーラーステインは1980年代からエティエンヌ・バリバールとともに連続セミナーを主催して労働の異質性の問題に取り組み、その成果を『人種・国民・階級』（1988）という論考集に示している。この経緯についてはBalibar, Wallerstein and Bojadžijev 2018も参照。若森・植村2019はこの論考集を21世紀の、とりわけ日本の状況に照らしつつ、「壊れゆく」資本主義の中を生き延びるための議論を展開している。

24）中山2022では、アメリカの1970年代の状況からインターセクショナリティ概念が抽出された経緯に言及した。

25）なお玉野井は1982年にこの英文論考がカナダの大学の雑誌に掲載されることになった際、日本の読者に向けて「若干の削除や加筆」（玉野井1977/1982/2002, 67ページ）を施した日本語の論考を刊行した。そこでは構成自体、ポランニーによる擬制商品の概念、つまり本来は商品でないにも関わらず、市場経済、資本主義のもとで商品となった三つの要素、労働（力）、土地、貨幣を軸として、あらたに整序されている。特に労働力については、土地の囲い込みに関するマルクスの分析、本源的蓄積概念の指摘に加えて、ポランニーの考え方がより立ち入って考察され、イリイチとの関連も付記された。

26）ただし玉野井は、Kindleberger 1974の批判などを視野に、ポランニーの記述が歴史的にやや不正確な部分もあるとも指摘している。

27）玉野井は先の論考で用益権の問題に触れ、ポランニーの1950年代後半の別の論考（『アリストテレスによる経済の発見』）に言及している（玉野井1977/1982/2002, 53ページ）。

28）Davis 2003は奴隷制と深く結びついたアメリカの監獄の歴史を概観し、ミシェル・フーコーなどに言及しながら、イリイチの行ったような歴史記述がヨーロッパの監獄の歴史であると整理した（Ch.3）。たしかにイリイチもフーコーを援用した。一方デイヴィスは、女性や黒人への「懲罰」の歴史はこれと異なるという指摘を行ったのであった。

29）植村2019、134-144ページ。また多木2016はこの問題を「見えない檻」、すなわち不可視の監獄と整理している（多木2016、50－60ページ）。

30）同書の最後には、これに関する大きめの文献解題を含んだ長い註がある。また第四章は「サブシステンス（邦訳では人間生活の自立と自存）に対する戦争」であり、ポランニーの提起した「居住か進歩か」の問いが、言語学的な観点から論じられている。

31）Illich 1978/1992, 邦訳 9 ページ。1978年初頭にセヴァグラム（インド）にあるガンジーが暮らした小屋を訪れ、この稿のもとになった講演は「ガンジーの小屋からのメッセージ」と題されていた。

32）王立英国建築家協会の150周年の式典において行った、「住むこと」と題した講演による（Illich 1984/1992a）。

33）Illich 1981/2009, p.57, 邦訳127ページ。ただし第四章の邦訳は英語版と必ずしも対応していない。ともあれイリイチは、もしポランニーがこの語に気づいていたら、「生活のあらゆる局面に埋め込まれている互酬性の型に由来する人間の暮らし」に、ヴァナキュラーという言葉を使ったのではないかと述べている。

34）「＜影の経済＞と＜ヴァナキュラーな領域＞はともに市場の外部にあって、金を支払われることのない領域である。それゆえ、両者はいわゆるインフォーマルな部門にとりこまれている。…だが前者は、構造的に産業社会だけに特有なものであり、後者は、ヴァナキュラーな社会に特徴的なものであって、産業社会においてひきつづき存在しうるものなのである」（Illic 1981/2009, 邦訳85-86ページ）。たしかに、たとえば料理などの家事労働は、それぞれの工夫や好みに応じた家仕事だが、家の外での賃金労働を支えるシャドウ・ワークにもなる。

35）たとえば植村2001、101ページ。ただし植村2001はむしろ、そうした見方を批判的に検討するために、

ここで言及している。

36）イリイチの論考の中では、「在ること」と「行為すること」の二つが混在しており、フランス語版と英語版の間にも違いがあるようだ。このため本稿では、この二つを併記して考えている。

37）イリイチはドイツ語の Eigenarbeit をあてており、これは資本から要請される自己マネジメント、セルフ・ケア（自助）に対置される言葉であると論じている（Illich 1980/1981, 邦訳159ページ）。つまり固有の仕事は、「仕事」といっても生産性や GDP に役立たなくてよい活動である。

38）「私の主要な諸論文は『エコノミーとエコロジー』という主題で統一されるように思う。」（玉野井1978/2002a, i ページ）

39）玉野井1974/2002a, 41ページ。ここにもポランニーのアリストテレス論や家政学との関わりが想起される。なお玉野井は同じ個所で、生態系（エコシステム）ということばはイギリスのタンスレー（A. G. Tansley）が1935年に用いたと述べ、生物が環境システムから切り離された真空の中ではなく生態圏の中にあると指摘した箇所を引用している。

40）「地方については、…「わたしのまち」「わたしのむら」という実感でとらえられる生活の小宇宙である。…もともと地方ということばは「地方（じかた）」とも呼ばれていた。「地形」、つまり土地の形状からはじまって各地域の農業や民衆の生活のあり方を指すことばだったと解される。それがだんだんと地域空間から遊離し、「地方（ちほう）」として「中央」への対立概念となってあらわれてきた。」（玉野井1977、111-114ページ）

41）「…近隣市場とも呼ばれるもので、われわれの日常生活の活動に不可欠な組織の一部と言える。近隣の蔬菜の生産者たちが毎日のようにみずみずしい野菜を運び込み、家庭の主婦が買い物籠をかかえてそこに立ちよるおなじみの市場風景の場所である。…私自身は…さしあたり今日のわが国できわめて重大な問題となっている生鮮食品の流通のあり方に関心を払っている。」（玉野井1977、121-123ページ）これは当時の国土庁が発表した「三全総」（1977年11月閣議決定）への批判であった。

42）「太陽エネルギーをとりこんで独立栄養源をつくる緑色植物が『生産者』、これに依存して生活する従属栄養生物が『消費者』と呼ばれ、人間はこの後者にふくまれている…。これは一見ことばの奇異な使い方のようにみえる。けれども、生態系の内部でエネルギーが太陽→植物→動物（人間を含む）→微生物の順で変換を遂げ、またこの食物連鎖の経路をとおして物質が、生産者である植物から始まって消費者を一まわりして再び生産者へと回流するという系の秩序を考えると、必ずしも不自然な使いかたではないことがわかる」（玉野井1974/2002a, 51-52ページ）。図１を参照。このように微生物や腐敗を積極的に位置づける見方は、ウィルスとの共生が焦点化された現代世界にも示唆的である。

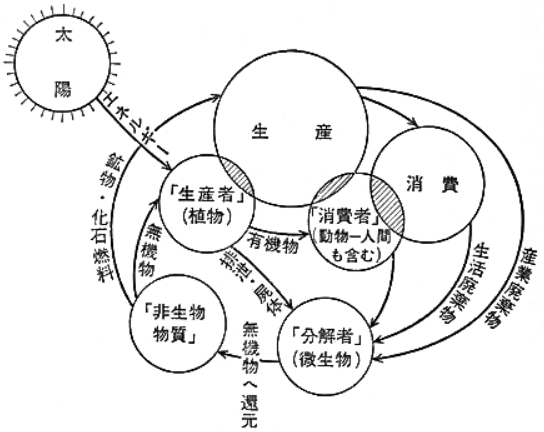

図１　玉野井によるエコノミー＝エコロジーの循環総体システム（玉野井1974/2002a, 53ページ）

43）この著書では、玉野井との出会いと「水土」という言葉を教わったエピソードが序の冒頭に置かれ、また前年秋に再会直前に玉野井が死去したことへの哀悼の意が示されている。

44）イリイチ1985/1986、256ページ。ここでのマクロコスモスは宇宙、ミクロコスモスは人間である。ただしイリイチ、そして玉野井やこの時期かれらと協働したバーバラ・ドゥーデンらは、中性的な個人ではなく男女というジェンダーを含んだ人間をミクロコスモスの単位とした。

45）イリイチ1985/1986に収録されたインタヴューでも、聞き手がうまく理解できずに、何度も質問を繰り返していた様子がわかる。

46）イリイチは特に17世紀のウィリアム・ハーヴェイの血液循環、医学によるその受容を重視している（イリイチ1986、98-100ページ）。

47）イリイチはこの関連で都市の脱臭、排便のプライヴァシー化を論じ、監獄が精神病院とともに最も汚臭を放って改革の対象となったことを指摘した（イリイチ1986、130ページ）。身体の拘束の問題は労働の変容だけにとどまらない。

48）竹田2013は、コモンズの考え方を負の財に適用し、ローカルな環境破壊・生態系攪乱、地域経済の疲弊などを負のコモンズ、水俣病など被害者が限定される公害や疾病をクラブ負財、パンデミックや国際金融恐慌等を負のネットワークと定義づけた（竹田2013、41ページ）。

49）玉野井＆鶴見1981/2002、202ページ。2021年５月には八田による台南、烏山頭（うさんとう）ダムの着工100周年を祝い、記念式典や関連行事が開催されたようだ（たとえば八田の出身地、金沢と現地を結んだオンライン会合については、北國新聞５月９日の報道がある。https://www.hokkoku.co.jp/articles/-/406101　（最終閲覧日2022年１月18日））。

50）玉野井と鶴見の両者ともに、適正な技術を実装した実績が水を介した地域の地縁、血縁を支える家族共同体、国家全体が一つの家族という論理へ結びついた歴史への礼賛となりかねないことを、かなり意識しながら議論を展開した（玉野井＆鶴見1981/2002、215-219ページ）。

51）この企業が戦後の水俣のチッソ株式会社であることはいうまでもない。廣瀬2003によれば、1908年に創業した日本窒素肥料株式会社は、1940年代にはアジア諸地域において、ダム建設による発電とコンビナート建設の事業に取り組んだ。たとえば国際河川であった鴨緑江の水豊ダムは、1937年から1944年にかけて朝鮮総督府と「満州国」政府とが共同で築いた大型ダムだが、実際には当時の日本政府の国策が大いに関係しており、日本窒素肥料（株）の子会社である朝鮮窒素肥料が全額負担、西松組（満洲側）や間組（朝鮮側）などが主体となり建設した。当時の工事の様子を記録した映像『鴨緑江大推力発電工事』（企画・製作：朝鮮鴨緑江水力発電株式会社 / 満州鴨緑江水力発電株式会社 1937～1944年。白黒45分、編集：熊野稔 撮影：影澤清）は、今日では下記のサイトで観ることができる。https://www.youtube.com/watch?v=5QLssPGm_1c（最終閲覧日2022年１月20日）

52）ダラスの人工湖の歴史的詳細には本稿では踏み込めないが、たとえばSimon & Ahmed 2018はこの地域が水をめぐる開発の対象となっていった20世紀の前半の歴史を簡潔に論じている。

53）大恐慌からの打開に向けたニューディール政策の主な事業として、TVA（テネシー川流域開発公社）の事業があったことは、あまりに有名である（McCully 1996/2001, pp.16-17など）。

54）アルンダディ・ロイは1999年にこれについて「国際的ダム産業は年間200億ドル規模の産業である」（Roy1999、邦訳32ページ）として、そこに常に政治家、官僚、ダム建設会社やその子会社、国際環境コンサルタント、世界銀行というセットが関わっていることを皮肉なトーンで論じている。

55）段2006、2015はこの問題を詳しく論じている。またMcCully 1996/2001にもこの事例に関する多くの記述がある。

参考文献

Balibar, E. and Wallerstein, I.

——— 1988. *Race, Nation and Class: Ambiguous Identities,* London/New York: Verso.（若森章孝・岡田光正・須田文明・奥西達也訳『人種・国民・階級：「民族」という曖昧なアイデンティティ』、唯学書房、2014年）

Balibar, E., Wallerstein, I., and Bojadžijev, M.

——— 2018, Is there an Option to Go Beyond Racism?, Bojadžijev, M. and Klingan, K.（ed.）, *Balibar/Wallerstein's Race, Nation, Class. Rereading a Dialogue for Our Times,* Argument Verlag/Haus der Kulturen der Welt, Hamburg, pp. 240-257.（「人種主義を乗り越えることはできるか」太田悠介・中山智香子訳『神戸市外大論叢』73（1）, pp.69-100）

Cangiani, M. 2006. From Menger to Polanyi: Towards a Substantive Economic Theory,『経済学史研究』48（1）. pp. 1-15.

Dale, G. 2016, *Reconstructing Karl Polanyi: Excavation and Critique,* London: Pluto Press.

Davis, A. 2003. *Are Prisons Obsolete?* New York: Seven Stories Press.（上杉忍訳『監獄ビジネス：グローバリズムと産獄複合体』岩波書店、2008年）

Dupuy, J-P. 2002, Detour and Sacrifice: Ivan Illich and René Girard, Hoinacki and Mitcham（ed.）, *The Challenges of Ivan Illich: A Collective Reflection,* pp. 189-204.

Hoinacki, L. and Mitcham, C.（ed.）2002. *The Challenges of Ivan Illich: A Collective Reflection,* Albany: State University of New York Press.

Illich, I.

——— 1973. *Tools for conviviality*, New York/Hagerstown/San Francisco/London: Perennial Library.（渡辺京二・渡辺梨沙訳『コンヴィヴィアリティのための道具』ちくま学芸文庫、2015年）

——— 1978/1992, The Message of Bapu's Hut, *In the Mirror of the Past: Lectures and Addresses* 1978-1990, New York/London: Marion Boyars, pp. 65-69.（「ガンジーの小屋からのメッセージ」桜井直史監訳『生きる思想：反＝教育 / 技術 / 生命』新版、藤原書店、1991年、pp.7-14）

——— 1980/1981,「自分に固有の仕事：政治的スローガンか、分析的カテゴリーか」『世界』No. 425,（4月号）, pp. 158-163.

——— 1981/2009, *Shadow Work,* London/New York: Marion Boyars（玉野井芳郎・栗原彬訳『シャドウ・ワーク』岩波現代文庫、2006年）.

——— 1984/1992a, Dwelling, *In the Mirror of the Past: Lectures and Addresses 1978-1990,* New York/London: Marion Boyars, pp. 55-64.（Originally, Address to the Royal Institute of British Architects, York, U. K., July 1984）（「住まいとガレージ：住人と居住者をどう区別するか」桜井直史監訳『生きる思想：反＝教育 / 技術 / 生命』新版、藤原書店、1991年、pp. 17-38.

——— 1984/1992b. H_2O and the Waters of Forgetfulness, *In the Mirror of the Past: Lectures and Addresses 1978-1990,* New York/London: Marion Boyars, pp. 145-158.（Originally, Lecture to the Dallas Institute of Humanities and Culture, Dallas, May 1984）

Kabeer, N. 1998/2000, Jumping to Conclusions?: Struggles over Meaning and Method in the Study of Household Economics, Jackson, C. & Pearson, R. *Feminist Visions of Development: Gender Analysis and Policy,* Abingdon/New York: Routledge, pp. 91-107.

Kindleberger, C. P.

——— 1974, The Great Transformation by Karl Polanyi, *Daedalus* 103（1）, pp. 45-52.

——— 1986, International Public Goods without International Government, *The American Economic*

Review 76（1）, pp. 1-13.

Kugelmann, R. 2002, Economy, Subsistence, and Psychological Inquiry, Hoinacki, L. and Mitcham, C.（ed.）, *The Challenges of Ivan Illich: A Collective Reflection,* pp. 73-87.

Majo, C., de, 2016, Ivan Illich's Radical Thought and the Convivial Solution to the Ecological Crisis, *The International Journal of Illich Studies,* 5（1）, pp. 113-139.

McCully, P. 1996/2001, *Silenced Rivers: The Ecology and Politics of Large Dams,* enlarged and updated edition, London/New York: Zed Books.（『沈黙の川：ダムと人権、環境問題』鷲見一夫訳、築地書館、1998年）

Nakayama, C.

——— 2018. Polanyi's Concept of Peace in a Complex Society, Brie, M. and Thomasberger, C.（eds.）, *Karl Polanyi's Vision of a Socialist Transformation,* Montreal/New York/Chicago/London; Black Rose Books.（June, 2018）, pp. 185-197.

——— 2020. Karl Polanyi as a precursor of world-systems theorists: an investigation of the theoretical lineage to Giovanni Arrighi, Desai, R. and Polanyi-Levitt, K.（eds.）, *Karl Polanyi and Twenty-First-Century Capitalism,* Manchester: Manchester University Press, pp. 231-249.

Polanyi, K.

——— 1920-22/2005, Wissenschaft und Sittlichkeit, Sein und Denken, Die Wissenschaft von der Zukunft（Behemoth）, Cangiani, M. Polanyi-Levitt, K., and Thomasberger, C.（ed.）, *Chronik der grossen Transformation: Artikel und Aufsätze 1920-1947,* Band 3, Marburg: Metropolis-Verlag,. pp. 172-214.

——— 1944/1957/2001, The Great Transformation: The Political and Economic Origin of Our Time, Boston: Beacon Press.（野口建彦・栖原学訳『新訳大転換：市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社、2009年）

——— 1947, Our Obsolete Market Mentality: Civilization Must Find a New Thought Pattern, *Commentary* 3(2), pp. 109-117.

——— 1957, Economy as an instituted process, Polanyi, K., C. M. Arensberg, Pearson, H. W.（ed.）, *Trade and Market in the Early Empires: Economies in History and Theory,* pp. 243-270.（「制度化された過程としての経済」玉野井芳郎・平野謙一郎編訳『経済の文明史』ちくま学芸文庫、2003年）

——— 1968, Karl Bücher, Sills, D.（ed.）, *International Encyclopedia of the Social Sciences,* pp. 163-164.

——— 1971. Carl Menger's Two Meanings of 'Economic', in *Studies in Economic Anthropology,* Dalton, G.（ed.）, American Anthropological Association, pp. 16-24.

——— 1977. '*The Livelihood of Man,* Pearson, H. W.（ed.）, New York/San Francisco/London: Academic Press.（玉野井芳郎・栗本慎一郎訳『人間の経済』岩波現代選書、1980年）

Roy, A. 1999. The Cost of Living, London: Flamingo books.『わたしの愛したインド』（片岡夏実訳、築地書館、2000年）

Simon, J-E, and Ahmed, W. 2018, The Promise of Progress: Modernity, Accumulation, and the Urbanization of North Texas Water in the 20th Century, *Human Geography* 11（2）, pp. 19-34.

Steinberg, T, 2019, Can Karl Polanyi Explain the Anthropocene? The Commodification of Nature and the Great Acceleration, Geographical Review, 109:2, 265-270, DOI:10.1111/gere.12342

Tamanoi, Y.

——— 1976/1978/2020, Economy and Ecology（trsl. Chapeskie and Yagi, *The History of Economic Thought* 62（1）, pp. 51-75）.

——— 1977/1983, Liberating Oneself from the Market Mentality: Reflections on Marx and Polanyi, *York*

Studies in Political Economy, Winter 1983, Second Issue, pp. 109-133.
Wallerstein,I. 2004, *World-Systems Analysis: An Introduction*, Durham: Duke University Press.

イリイチ, I.
――― 1986.『H_2O と水：「素材」を歴史的に読む』（伊藤るり訳、新評論）
――― 1985/1986.「イバン・イリイチへのインタヴュー：H_2O・現代を洗い流す「枯れはてた水」玉野井監修『ジェンダー・文字・身体』242-267ページ.
イリイチ, I. & 宇沢弘文 1981,「プラグを抜く：経済学の論理を超えて」『世界』No. 425,（4 月号）、pp. 145-157.
イリイチ, I. & 玉野井芳郎 1982.「現代産業文明への警告」（玉野井芳郎『生命系のエコノミー』1982年、新評論 . 224-251ページ. 初出は『週刊エコノミスト』（毎日新聞社）1982年 6 月22日号）
植村邦彦
――― 2001『「近代」を支える思想：市民社会・世界史・ナショナリズム』ナカニシヤ出版
――― 2016『ローザの子供たち、あるいは資本主義の不可能性：世界システムの思想史』平凡社
――― 2019『隠された奴隷制』集英社新書
川田侃・鶴見和子編『内発的発展論』東京大学出版会、1989年
多木陽介 2016『（不）可視の監獄：サミュエル・ベケットの芸術と歴史』水声社
竹田茂夫 2013「危機のコモンズの可能性」『大原社会問題研究所雑誌』655、33-47ページ
玉野井芳郎
――― 1974/2002a.「エコロジーを求めて」『エコノミーとエコロジー：広義の経済学への道　新装版』みすず書房、2002年、41-62ページ（初出は『経済セミナー』11月号）
――― 1974/2002b.「ドイツ経済学の伝統：空間とリージョナリズム」『エコノミーとエコロジー』127-160ページ（初出は『思想』12月号、1629-1647ページ）。.
――― 1976/2002「エコノミーとエコロジー」（『エコノミーとエコロジー：広義の経済学への道　新装版』みすず書房、63-95ページ。初出は『思想』 2 月号）
――― 1977「まちづくりの思想としての地域主義」『地域主義の思想』東洋経済新報社
――― 1977/1982/2002「マルクスとポランニーに関する省察：商品交換の外的性格の発見」『生命系のエコノミー：経済学・物理学・哲学への問いかけ』新評論、pp. 39-71.
――― 1977/1978/2002.「解題と翻訳：K. ポランニー遺稿『メンガーにおける＜経済的＞の二つの意味』」『エコノミーとエコロジー：広義の経済学への道　新装版』みすず書房、312-337ページ（初出は『現代思想』1977年10月号）
――― 1978/2002a.『エコノミーとエコロジー：広義の経済学への道　新装版』みすず書房
――― 1979/2002「マルクス、ポランニー、イリイチ：非自立化社会のクライシスのなかで」『生命系のエコノミー：経済学・物理学・哲学への問いかけ』新評論、pp. 255-269.
――― 1981,「イヴァン・イリイチの問題提起」『世界』No. 425、pp. 177-181.
――― 1981/2002「経済学が見落したエントロピー：経済学と物理学の歴史回顧」（『エコノミーとエコロジー：広義の経済学への道　新装版』みすず書房、86-102ページ。初出は『科学朝日』 7 月号（付記は『数学セミナー』12月号））
――― 1982/2002「文化における普遍と特殊」『生命系のエコノミー：経済学・物理学・哲学への問いかけ』（新評論）144-164ページ。（初出は1982年日本哲学会大会報告。『哲学』No.32）
――― 1982/2006.「訳者解説」（イリイチ , I.『シャドウ・ワーク』玉野井芳郎・栗原彬訳 , 岩波現代文庫、pp. 303-327.

――― 1985/1986「人間におけるジェンダーの発見：女、そして男の世界」（玉野井監修『ジェンダー・文字・身体』新評論5-32ページ）
――― 1985/1990「コモンズとしての海」『玉野井芳郎著作集・３』学陽書房231-238ページ。（初出は『南島文化研究所所報』1985年12月25日）
玉野井芳郎＆槌田敦
――― 1977/2002「エントロピーと開放定常系」（玉野井2002『生命系のエコノミー：経済学・物理学・哲学への問いかけ』（新評論）167-198ページ。初出は『現代の眼』1977年11月号）
玉野井芳郎＆鶴見和子
――― 1981/2002「台湾の水利システムをめぐる報告」（玉野井2002『生命系のエコノミー：経済学・物理学・哲学への問いかけ』（新評論）199-223ページ。初出は『現代の眼』1981年６月号）
玉野井芳郎（監修）・新評論編集部編1986『ジェンダー・文字・身体』新評論
段家誠
――― 2006『世界銀行と NGOs ナルマダ・ダム・プロジェクト中止におけるアドボカシー NGO の影響力』築地書館
――― 2015「世界銀行の開発援助レジームの形成と変容：ナルマダ・ダム・プロジェクト中止課程とインスペクション・パネル設立を事例にして」『阪南論集　社会科学編』51(1)、1-14ページ
鶴見和子
――― 1980/1997「内発的発展論へむけて」（『鶴見和子曼荼羅Ⅰ』藤原書店、pp. 515-536）初出：川田侃・三輪公忠編『現代国際関係論：新しい国際秩序を求めて』（東京大学出版会、1980年）
――― 1989/1997「内発的発展論の系譜」（『鶴見和子曼荼羅Ⅰ』藤原書店、pp. 537-550）初出：川田侃・鶴見和子編『内発的発展論』（東京大学出版会、1989年）
――― 1999 鶴見和子「あとがき：倒れてのちのわたしの「内発的発展論」」（『鶴見和子曼荼羅Ⅸ』藤原書店、pp. 342-346）
中野佳裕 2019「玉野井芳郎の地域主義：人新世におけるその現代性と可能性」日本平和学会2019年度秋季大会報告原稿（Nakano_PSAJ20191103_paper.pdf 最終閲覧日2022年１月16日）。
中山智香子
――― 2010「非市場型社会の構想：K. ポラニーの二つの「戦後」」『社会思想史研究』34, pp. 37-51
――― 2022「グローバル・サウス・ユートピア？資本主義分析の視角から」武内進一・中山智香子編『ブラック・ライヴズ・マターから学ぶこと：アメリカからグローバル世界へ』東京外国語大学出版会、近刊
広瀬貞三 2003「『満州国』における水豊ダム建設」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』６、1-27ページ
若森章孝・植村邦彦 2017『壊れゆく資本主義をどう生きるか：人種・国民・階級2.0』唯学書房、2017年